

入選 高学年の部

お姉ちゃんからのプレゼント

富山県
富山大学人間発達科学部附属小学校六年 塚本 祥子

青い空、白い雲。

今日は家族三人でお墓参り。

「ゆうこ、今日は暑いね。」

の母の二言をスタートに、三人で楽しくおしゃべりをしながら墓石を磨く。次は花活けだ。いつも、ゆうこお姉ちゃんが好きだったきれいな花をたくさん持つてきて、母が心をこめて活ける。最後は父が線香をあげて、三人は静かに手を合せて目を閉じる。いつもの光景だ。

父と母は姉に何を語りかけているのだろうか。今までの私は、お墓の前で、学校であった楽しかったこと、嬉しかったこと、さみしかったこと、悲しかったことなどを姉に語りかけていた。でも、今回は違う。

「お医者さんになる。患者さんやその家族と心を通わせて力を合わせ、温かい心で向き合うことができるお医者さんになる。」という夢を姉に報告するのだ。

姉は生まれつき障害を持ち、体も弱かったので、よく病氣にかかり入院を繰り返したが元気な時は、いつも明るくて笑っていた。そして姉と私は、食事も一緒、眠るのも一緒、もちろんいたずらも……二人でやって二人で叱られたけれど、楽しかった。おやつだって、大きいままでは食べることができないお姉ちゃんに、私がちぎってあげると、お姉ちゃんはニコニコ、残りは私がバクリ、一つのお菓子を分けて食べる。おいしかった。お姉ちゃんといると、どんな時も楽しかった。

こんな日がずっと続くと思っていた……。
こんな日がずっと続いて欲しかった……。

私は六年生になった今、小さい頃から変わることのない、医者になるという夢について考えてみた。そこで気づいたのだ。この夢は、姉が私に残してくれたプレゼント。お姉ちゃんがゆうこお姉ちゃんだったからこそ、それができた夢だ。お姉ちゃん、ありがとう。

姉が病と闘う中、すてきなお医者さんに出会った。姉の病気を治そうと、最高の治療はもちろん、不安や疲れをかかえて姉の病と闘う私たち家族にも温かい心使いをしてくださった。だから、姉を中心として家族とお医者さんの三者の間には、信頼関係が生まれ、心をつなげて力を合わせる事ができた。

この頃から私の夢ができたのだ。
夢に向かって歩く、それは大変なこともあるけれど、今まで困った時も辛かった時も、乗り越える力がわいてきた。きつと、お姉ちゃんが、私が歩く道にそっと明りをともしてくれているんだね。

ゆうこお姉ちゃん、いつもありがとう。
私は、お姉ちゃんにもらった夢に向かって二歩一歩しっかりと歩いて行くよ。
これからも私のことを見守っていてね。